

「縁・えにし」のよろこび

～秋の仏教婦人会法座～(2018年10月22日)

ご講師に北嶋文雄師(筑前町・光蓮寺)をお迎えし、阿弥陀さまの御心をお取り次ぎいただきました。

北嶋先生は、本願寺が出版しています「こども新聞」に執筆をされています。この「こども新聞」は、たいへんわかりやすく仏教の教えを伝えてくださいます。こども向けでもありますが、私はお参り時に大人の方にも配布しています。本堂にも置いていますので、どうぞお取りくださいませ。



＜次回＞春の仏教婦人会法座は、3月26日(火)です!

～親鸞聖人・報恩講(756回忌法要)(2018年11月12～14日)～

浄土真宗のお寺で、特に大切にさせていただく法要が「報恩講」です。親鸞聖人の御仏事であり、この度は756回忌でした。

ご講師には安方哲爾師(正満寺・大阪府貝塚市)をお迎えし、最終日には雅楽の音色に包まれてのお荘厳、そして婦人会役員の皆さまがお齋をご用意してくださいました。

親鸞聖人があきらかにされた、浄土真宗の御教えをご法座を通して、ご一緒にお聞かせいただきますよう。



ご講師 安方師

ナモ(南無)net



おぶっばん お仏飯…

お仏飯…“お仏飯”をお供えする意味は、何も仏さまがご飯を召し上げられるのではなく、私たちが生かされているのちに感謝するあらわれとして、炊いたご飯をお供えするのです。私たちの生活での恵みの象徴がお米なのであります。

朝のお参り時にお供えし、直ぐにお下げいただいて大丈夫です。それを御下がりとして頂かれることが報恩感謝のお姿でもあります。

【真教寺における、お仏飯米代・もち米代について】

現在、各地区の総代(世話人)様に各ご門徒宅(旧来のご門徒)にお伺いしていただき、真教寺の年間各法要にお供えするお仏飯のお米代(700円)をお預かりしていただいています。

この伝統は、ご門徒様がその年とれた新米(もち米)をお寺にお供えされていたのが始まりです。その伝統が形を変えながらも、いまに受け継がれています。

仏さまへの感謝のあらわれとして、お仏飯のお供えの意味を次代に伝えて参りましょう。



阿弥陀さまからのお手紙

『親の気持ちで親を動かせる』

安方 哲爾(大阪府貝塚市 正満寺)

お経さまをいただきますと、阿弥陀さまは「若^{にやく}不生者^{ふじょうしや} 不取正覚^{ふしゅしやうかく}」との誓いを建てられたとあります。これは「もしあなたが浄土に生まれることができなかつたら、私は仏とはならない。自身が救われないのだよ」という意味です。阿弥陀さまは、高いところから私たちを見下ろして、「どれどれ、私の気に入ったものだけ救ってやるか」といような仏さまではないのですね。「あなたが救われなかつたら、私の苦しみも終わらないのだよ」と共に苦しんでくださるのが阿弥陀さまです。だからこそ、お念仏の先輩方はこの仏さまを「親さま」と呼び、身近に感じ、敬ってきたのです。

阿弥陀さまという仏さまは、私たち衆生^{しゆじやう}の罪を見てもそれを裁^{さば}きません。「あなたのところに南無阿弥陀仏という名の仏となつて至り届き、あなたに南無阿弥陀仏を聞かせて救うよ」と語りかけてくださいます。

阿弥陀さまは私の親さまです。親はわが子の苦しむ姿を見た時には、ただただわが子に寄り添おうとするのではないのでしょうか。その時には生き方を示すことも、罪を告げることもしないのではありませんか。そうして何かしてあげねばならないという気持ちで、親を動かすのではないのでしょうか。

ある父と娘の親子が二人で暮らしていました。娘さんも成人して仕事をしています。娘さんは最近、仕事のことやプライベートなことでも悩みを持っておられました。ある日、娘さんが夜遅く疲れ果てて帰ってきました。涙をこらえて帰ってきた娘さんは、台所のテーブルの上にお父さんが作ってくれた食事があるのを見つめます。別に相談をしたわけではないのですが、お父さんは娘さんが悩んでいることを知っていたのですね。

そんなことをする父ではなかった。いつも母の前では威張りちらしている父だった。その父がわたしの苦しみを知ってくれていたのだ。経は自分でご飯を作る元気はなかった。お腹なんか減っていない。何をするのも、もう嫌だ。そう思っていたけど、父の気持ちが変わった。作る気も食べる気もなかったけど、せつかく父が作ってくれたのだから食べてみよう。…何これ、おいしくない。塩辛い、へんに甘い。味付けが悪い。どうすればこんなまずい味付けになるの。食べられたものじゃない。でも…食べた。父が慣れない手つきで作ってくれたものだ。めったに持たない包丁で私の事を心配して作ってくれたの。まじい、まじい、と思いつつ、全部食べた。食べ終わったら何となく力がわいてきた。もう何もしたくない、生きていくのもつらいと思いがら帰ってきたが、何だか力がわいてきた。お父さん、ありがとう。明日の朝起きたらお礼を言おう。お父さん、また明日から頑張るからね。

お父さんはなぜ料理を作ったのか。作っても娘は食べないだろう。食べてもすぐやめて残すだろう。きつと「おいしくない」と文句を言うに違いない。わかつてはいるけどなぜ作ったか。それは親

として娘のつらさを黙ってみていられない、何かをしてあげたいという親の気持ちが料理を作らせたのです。そのときのお父さんの気持ちは少しも見返りを求めない親の愛情です。親は無条件で子どもを愛します。それが慈悲(じ)の心です。阿弥陀さまはお慈悲の親さまです。私の生き方を見て、点数をつけるようなお方ではありません。だからこそ、その仏さまのお慈悲のもとで私たちは生きていけるのですね。仏さまは私の苦しみを、すべて見抜いてくださいました。だからこそ条件を出して「こうすれば救ってやる」といようなことを言われるのではなく、煩悩^{ぼんのう}の赴^{おもむ}くまま無常の世界を生きる、愚かな罪深きものに「罪を改めよ」というのではなく、「その罪深きものを救うために、私が罪人(つみびと)を救える仏になるよ」と誓ってくださった仏さまです。お経さまには「五劫の間思惟^{ごうしゆ}し、永劫の間(あいだ)修行して」とあります。親の気持ちが親を動かせるように、阿弥陀さまの願いが阿弥陀さまをして私にはたらきかけてくださるのです。

「あなたを救わなければ私が救われないのだよ。私が南無阿弥陀仏と出向いていって、あなたの身に入り満ちて、その口からお念仏となつてこぼれ出よう」と、いま阿弥陀さまのおはたらきが私の身の上に「南無阿弥陀仏」と現れ出てくださっています。有り難いことですね。

(この法話を書かれた安方先生は、昨年「報恩講法要」のご講師でした。)

